

## 伝統俳句と滑稽 金澤 健

今現在の伝統俳句の総帥である稲畑汀子氏が、祖父であり伝統俳句の基礎を築いた偉大な俳人でもある高浜虚子の言説（虚子俳話）を解説した著書『花鳥諷詠、そして未来』を出しておられます。同著書に当たることで、伝統俳句に於ける滑稽に対する基本姿勢を探ってみたいと思います。

稲畑氏によると、「虚子は明白に俳句は俳諧から生まれ出たものであると言いきっている」と述べておられます。そして、俳諧の挨拶という伝統は、当然俳句に受け継がれているとも述べています。いや、単に受け継ぐという以上に、「俳句は挨拶そのものである、とまで虚子は主張している」と解説されています。虚子が強く主張した「存問」という方法こそが、「俳句作者が自然の万象に対する挨拶そのものである」との理解を示されています。

ここで、俳句評論で名高い山本健吉氏の持論を引用したいと思います。氏曰く「俳句の要諦は三つ、即ち、滑稽、挨拶、即興なり」です。座の文学である俳諧は、「皆で集まり、時候の挨拶（発句）で口火を切り、座の人々が即興で句を詠み合い（付合い）、皆で談笑の場を打ち開く（滑稽を大いに楽しむ）」ことにこそ醍醐味があると、山本氏は繰り返し述べています。時候の挨拶（発句）、付合い（即興）、談笑（滑稽）こそが俳諧文芸の精髓だったというのが山本氏の主張であり、私も同意するものであります。

虚子は、「俳句は俳諧を受け継ぐ文芸である」と明確に認識しています。そうであるならば、三要素（挨拶、即興、滑稽）すべてを同等に扱い、受け継ぐべく最大限の努力を払うべきだったのではないのでしょうか。即興に関しては、句会に於ける席題の形で命脈をいささか保っているのかもしれませんが、滑稽に関しては、俳句の実作や句会活動に於いてまったくと言っていいほどに顧慮されていないのは理解に苦しむところであります。

哲学者の鶴見俊輔氏に、「市井の人々のごくありふれた日常生活（俗）と芸術（雅）の境に位置する芸術を限界芸術と呼ぶ」との論があります。私は「座の

文芸である俳諧こそ限界芸術の代表例である」と確信しております。座の文芸に於いては、座を和ませ、盛り上げる最初の挨拶（発句）と、座に談笑を呼び起こす滑稽の二つがどうしても欠かせぬ車の両輪であった（即興は、駆動輪ではなかったと考えると）に違いありません。このどちらかが抜けても、俳諧文芸は立ち行かなくなる筈です。世界に誇るべき俳諧文芸を正しく受け継ぐ為にも、挨拶（存問）と共に滑稽（談笑）にも意を払うことを強く主張したいと思えます。稲畑氏によると、虚子は「俳諧から生れ出た俳句」の文言に続けて、「俳句は平俗の詩である。俳句は日常の詩である」と俳句を位置付けています。そうであればなおさら、雅の要素が勝つ「時候の挨拶」だけでなく、俗的要素に溢れた談笑の場「滑稽」にも意を払うべきだったのではないのでしょうか。いずれにせよ「俳句は挨拶である」に付して「俳句は談笑、滑稽である」と言明するべきだったと考えます。

十七音で挨拶（雅）と滑稽（俗）双方を同時に詠み込むことは至難の業であることは、実作者ならばどなたも身に染みて理解されていると思えます。しかしながら、限界芸術の至宝（雅と俗の境界上に位置する）ともいうべき俳諧（俳句）文芸を志したからには、その努力を惜しまないことが必然的に求められていると心すべきではないのでしょうか。

[つづく]